

『太白陰経』鑑人篇の相術について

佐藤 実

大妻女子大学比較文化学部

キーワード：『太白陰経』、鑑人篇、相術、相書、兵書、兵法

抄録

現在われわれが目睹しうる単行本としての相書は宋代以降に成立したものがほとんどである。では、宋代以前にも存在していたはずの相書はどのような内容であったのか。その一端を探るべく本稿では唐の李筌が著した兵法書『太白陰経』の鑑人篇をとりあげ、將軍を選任するために援用された相術の内容を検討した。鑑人篇は、まず人間の外から見える部分から不可視の体内の状態を把握しようとする医学の知見を相術の根拠としていた。また身体を顔面部、非顔面部、枕骨・額文という三つの部位に分類し、それぞれの部位から富貴・福祿といった吉凶、役職・地位、性格・能力を判断するが、とりわけ枕骨・額文は將軍を占う部位として特徴的であることを明らかにした。

はじめに

中国の相書は『漢書』芸文志以来、一貫して歴代の図書目録に著録されてはいたがその種類は限定的であった。その状況が一変するのは宋代以降である。宋代以降、目録上では極めて多種の相書が刊刻される。現在われわれが目睹しうる単行本としての相書は宋代以降に成立したものがほとんどである。では、宋代以前にも存在していたはずの相書はどのような内容であったのか。前稿においては隋の蕭吉が撰した『五行大義』に引用された相書の内容を検討した^{〔一〕}。本稿では唐の李筌が著した『太白陰経』をとりあげたい。『太白陰経』はそもそも

兵書である。だが軍の司令官である將軍を選抜するために相術の知識が鑑人篇にまとめられているとひとまずは考えておく。一方で同書には鑑才篇という、人材の選び方を説く篇がある。前者がいわゆる「兵陰陽」に属するものとして呪術的であると否定的に扱われるのに対し、後者は高く評価される傾向にある^{〔二〕}。この鑑人篇と鑑才篇との比較によって相術を相対化することを目指したが、その第一段階が本稿である。なお使用するテキストは『守山閣叢書』所収のものである。

一 鑑人篇の構成

『太白陰経』卷三・鑑人篇は大きくは二つに分けられるであろう。前半は「経曰」ではじまり、「神有餘法」「形有餘法」「心有餘法」という三つの「有餘法」まで（「有餘」は余りがある、充実しているの意）。後半は「鑑頭、目、鼻、口、舌、齒法」「鑑頷、耳、胸、背、手、肚、黒子、面形法」「鑑頭骨、玉枕、額文法」という三つに分けられた「鑑……法（……をみる法）」で、具体的にどういった形であればどういう人物であるかといった内容である。以下、前半の「経曰」から確認していきたい。

まず鑑人篇は以下のように始まる。

経にはつぎのようにある。そもそも人についていうと、その人の外面をみれば、その人の内面が充分にわかる。七つの穴（目、耳、鼻、口）は五臓の門戸である。九候と三停は一尺の顔のなかに決まっています、智・愚と勇・怯は一寸の眼のなかに現れでる。また天倉（こめかみ）と金匱（こぼな）のかたちによって貴賤、貧富がわかる。いったい將軍を誰かに任せようとするのなら、まずその人の容貌をみて、それからその人の心を知るのである。経曰、凡人、觀其外、足知其内。七竅者、五臓之門戸。九候三停、定一尺之面。智愚勇怯、形一寸之眼。天倉金匱、以別其貴賤貧富。夫欲任將、先觀其貌、後知其心。

『太白陰経』の各篇は「経曰」で始まるのだが、出典がつきとめられるものとそうでないものがある。ただし他篇の例をみると、冒頭の数句が他書からの引用になっている場合が多い。鑑人篇ではこのあとに「神有餘法」ではじまる三つの「有餘法」がつづき、内容が変わるので、最長でみつもれば右に引用したところまでが經典の引用になり

うるのではないかと思われるが、冒頭の「凡人、觀其外、足知其内」は医書である『黄帝内経靈枢』本藏篇の「視其外應、以知其内藏、則知所病矣」に近い。『靈枢』本藏篇は身体の外面（皮膚、筋肉、骨など）の形や色つやなどから身体内の臓腑に生じている異常を把握し、そのうえで疾病を判断することを説く篇である。つづく七竅（七つの穴）と五臓の關係性を説くのはまさに中国医学の定跡であり、『黄帝内経素問』の五藏生成篇や六節藏象論篇などでいわれている。また、つづく九候と三停は、三停は相術でいわれる顔の三分割で、上停（額）、中停（鼻）、下停（口から頷にかけて）だが、九候は医学用語であり、身体全体を三分割したうえで、それぞれの三つの部位を診る（三×三＝九）診断法（三部九候診とよばれる）であり、これも『素問』三部九候論篇にみえる。相術における九候が何を指していたのかは不明だが「三二」「九候三停」という言い方も医学の「三部九候」を踏まえていると考えられる。つまり、外面から内面を把握しようとする鑑人篇において、その根拠に中国医学の枠組みを持ってきていることになる。

人の外見から当人の性格や能力ひいては未来を判断することに対する批判は『荀子』非相篇をはじめとして古くから当然であった。したがって鑑人篇冒頭における医学理論の援用は、荀子以来つづく相術批判にたいするひとつの根拠提示ともいえよう。

そして將軍の選任については容貌から内面を知ることが必要であることが説かれ、兵書である『太白陰経』における鑑人篇の位置づけがここで判明する。一般論として人は外から内がわかるとされたが、「欲任將」の場合はまず「貌」をみて、それから「心」がわかると言いかえられている点にも注意したい。

凡人 觀其外、足知其内。
任將 先觀其貌、後知其心。

このことは「貌」と「心」にかかわる問題として、次節でまた言及する。

二 鑑人篇における人間観

つづけて「神有餘法」「形有餘法」「心有餘法」という三つの「有餘法」の解説がある。ここでいう「有餘」とは充実している、満ちているという意味であり、それぞれ人の「神」「形」「心」が充実しているとはどういうことが説かれる。

「神」の充実をみる法。見た目が堂々としていて、こころが透き通っている。音楽や女色といった誘惑によって志をかえることなく、世の中の栄枯盛衰によって行動をかえることがない。これを「神」が充実しているという。

「形」の充実をみる法。頭のとつぺんが大きく高く、腹がどつしりとしている。鼻はまるくて真つ直ぐ、口は四角くてかどがたっている。額と額が向かい合い、頬と耳が高くそびえる。肉付きがよく充分であり、骨格ががっしりして露出していない。眉目ははっきりとしていて、手足は血色が良い。背が低い者と比べると高く、体が小さい者と比べると大きい「四」。これを「形」が充実しているという。

「心」の充実をみる法。悪事をさえぎり、善事をほめる。自分を後にして、人を先にする「五」。人に病気がないことをみずからの立派さとみなし、人に危険がおよんでいないことをみずからの安心とみなす。よく陰徳をほどこし、つねに人にたいして偽りが

ない。度量がきわめて大きく「六」、小さいことにこだわらない。これを「心」が充実しているという。

神有餘法。容貌堂堂、精爽清徹、聲色不變其志、榮枯不易其操、是謂神有餘。

形有餘法。頭頂豐停、腹肚濃厚、鼻圓而直、口方而稜、頤額相臨、顴耳高聳、肉多而有餘、骨粗而不露、眉目明朗、手足紅鮮、望下而就高、比大而獨小、是謂形有餘。

心有餘法。遏惡揚善、後己先人、無疾人以自賢、無危人以自安、好施陰德、常守忠信、豁達大度、不拘小節、是謂心有餘。

以上から判断すると、「形」は一般的に理想とされる容貌であり、「神」と「心」については「神」はより本質的な性格、「心」は具体的な倫理的・道徳的な正しさを指しているようである。

この「有餘法」はこれ以後の相書においてもしばしば言及される。たとえば『月波洞中記』では「心」は省略され（あるいは「心」が「神」に集約され）、「神」と「形」の対となり、それぞれが「有餘」であることにくわえて「不足」するケースも考えられている（冥度篇）。さらに『神相全編』になると、これら「神」「形」の「有餘」と「不足」が「論形有餘」「論神有餘」「論形不足」「論神不足」と独立した篇名として組み込まれる（巻一）など、相書のテーマとして引き継がれていく事項である。

ここで注意したいのは、この鑑人篇において「神」「形」「心」の「有餘法」が「夫欲任將、先觀其貌、後知其心」の直後に置かれていることである。將軍を選ぼうとする場合は、候補となる人物の「貌」をみてから「心」を知るべきだと述べつつも、つづくのは「貌」と「心」ではなく、「神」「形」「心」が充実しているかどうかの見方が説明され

ているのである。これはどういうことか。

本稿では「貌」をパラフレーズしたものが「神」と「形」であるとかんがえたい。そもそも「神有餘法」では「容貌堂堂」であることが第一にあげられていた。つまり「貌」というのはただ単にかたちをいうのではなく、その人の本質的な性格をもあわせたものを指すのではないか。我々の実感としても、容貌が堂々としている、というのとはかたちに加えて堂々と思わせる何かを兼ね備えた者のことである。そうすると『太白陰経』では人間を「貌」と「心」からなるとみていたのではないか。

そう考える根拠として、卷二・鑑才篇の「其の才、通にして周なるを閲し、其の貌、厚にして貴なるを鑑み、其の心、貞にして明なるを察す（閱其才通而周、鑑其貌厚而貴、察其心貞而明）」をあげておく。これは、すぐれた君主が人材を選ぶ際のポイントであり、個人の「才」のほかに、「貌」と「心」がセットになっていることがわかる。さらにいうならば、鑑才篇が「才」「貌」「心」のうち「才を鑑みる」ことをテーマとするのに対し、残る「貌」と「心」を問題とするのがこの鑑人篇ということになる。

「貌」と「神」「形」「心」の関係はつぎのようになる。



三 身体部位の区分と「心」の諸相

鑑人篇は以上のような人間理解を提示したうえで、以下、具体的な

身体部位の「貌」と「心」の関係について言及する。つまり「ある部位がAというかたちであればその人はBである」という形式で記述がつづく。

ここでまず身体部位の区分について確認しておく。鑑人篇は先述したように、観察する部分を三つにわけている。大きくみれば身体の上から下部にむかって二つにわかれ、最後が相術に特有の部位となる。

第一のグループは「頭、目、鼻、口、舌、歯をみる法（鑑頭、目、鼻、口、舌、齒法）」であり、ついで第二のグループは「頷、耳、胸、背、手、腹、ホクロ、顔のかたちをみる法（鑑頷、耳、胸、背、手、肚、黒子、面形法）」となる。第一グループは首より上部で、なおかつ頷と耳を除く部位。頷と耳を我々のいわゆる「顔」から除外しているところが興味ぶかい。頷については、頭蓋骨と頷（下顎骨）が関節によって連結しているとみなしているからだろうか。舌や歯など後の相書にも言及される部位がすでに見られる。

その頷と耳からはじまる第二グループは、胸、背、手、腹といった体幹部と体肢部（足についても言及あり）、さらにホクロと面形（正面からみた顔のかたち）。標題には含まれていないが、頸部（項、頸）、そして声についての言及もある。声色や声量は後の相術においてもしばしば判断部分としてとりあげられる要素であり、相る対象となる。これは知覚可能であれば「形」とみなされる中国思想の伝統とも通じる「七」。たとえば音楽も気の現れ出た「形」として認識され、その気が作者の心のあらわれであり、鑑賞者に作者の気持ちが音楽を通じて伝わる「八」。

そして最後の第三グループが「頭骨、玉枕、額の文様をみる法（鑑頭骨、玉枕、額文法）」。

頭骨は頭との違いが不明だが、本文では頭骨

ではなく「脳頭」に作り、「脳頭高聳起、將軍（脳頭）が高くそびえ立つのは將軍となる」とある。そして以下は玉枕と額文（額のシワの意だが実際には眉間の文様）についての説明となる。玉枕は後の相術でもしばしば言及される部位で、後頭部の骨の形「九」。額文も額や眉間のシワの文様。玉枕も額文もどちらも文字や文様として示されるもので、すでにこの鑑人篇で確立されていることがわかる。

さて、それぞれの内容についてだが、先述のように身体部位の「貌」と「心」の関係について言及されている。「ある部位がAというかたちであればその人はBである」という形式なのだが、具体的には四字句、二句からなるものが多い。最初の四字句が部位とその形。次の四字句がどういふ人物かを示している。「AであればB」という形式である。たとえば第一グループの冒頭は、「虎頭高視、富貴無比」となっていて、「虎の頭のように高きを見やるようであれば、比類ない富貴である」となる。

ここで注意したいのはBの位置にくる「心」の内容である。今挙げた例でいえば「富貴無比」が「心」の内容に相当する。ここでは「心」の内容を、①将来、富貴・福祿（幸福と俸祿）・長寿であるか否か、吉凶について、②将来、就く役職・地位、③性格・能力、の三つに大類した。①②は未来のことを占断する内容。①は人にとつての一般的な禍福であり、それに対し②はどういった地位になるか、とりわけ將軍や將軍相当となるかにフォーカスしたものの。③は性格や能力である。さきに見た「心有餘法」と照らしあわせるならば、もつとも「心」と呼ぶにふさわしいものがこの③である。

煩瑣をいとわず第一から第三グループの文章を引用して検討して

みたい。原文には①には傍線、②には点線、③には波線をつけておいた。まずは第一グループから。

頭、目、鼻、口、舌、歯をみる法

トラの頭のように高きを見やるようであれば、比類ない富貴である。サイの頭のように険しくそびえ立っていれば、ありあまる富貴となる。ゾウの頭のように高く広々としていけば福祿にずっとありつける。シカの頭のように側面が長いと、強い意気込みをもつ。カメの頭のように縮こまっていると、大食漢で無能である。カワウソの頭のように横に広いと志が四方に開けている。ラクダの頭のようにぼんやりしていれば福祿がたんまり。ヘビのように平らで薄っぺらな頭であれば財産はまばらで少ない。黒いたてがみの白馬のようにとがった頭であれば何度も災難に遭い貧しい。ウサギの頭のように小さくて真つ直ぐな頭は志が低劣である。イヌの頭のようにまるく突きでいけば、泣いてばかりいる。

眉が真つ直ぐで先があがっていれば、富貴でますます吉である。眉が薄くて乾いていけば、信頼はあまりおけず、欺くことが多い。髪の毛は細かいのがよく、あごひげは粗いのがよい。

目は光り輝き、明るく清浄であれば貴い身分となる。目鼻がはつきりとしていけば強い精神の持ち主である。眉目指爪が「はつきりしていれば？」人に施すことを好む。目鼻口が小さければウソが多くて真実が少ない。目鼻口が大きければ真実だけがあつてウソはない。目のなかの赤い筋が腫を貫いていると兵士として亡

くなる。

ニワトリの目のようで、カールした頭髪であれば、淫らか盜癖があるかのどちらかである。ヒツジの目のように真つ直ぐを見ずえるようであれば、妻子を殺害する。ブタの見張るような目であれば刑罰による災いが続き、また少しは貴い身分となる。ハチの目、ヤマイヌの声のようであれば残忍な行為を平気とするのが常である。オケラのような目であれば何を考えているかわかりにくい。魚のような目であれば災厄に多くあう。サルのような目であれば貧窮する。タカのような視線、オオカミのように振りかえるようであれば常に嫉妬心を抱いている。ウシのような頭で、トラのような視線であれば比類ない富貴である。

鼻がまるく隆起して充実していれば富貴であり、ずっと吉である。鼻の穴が小さくて縮こまっていれば吝で充足することはない。フンコロガシのような「小さい」鼻であれば智慧が少ない。キツネのようなあごヒゲであれば信用するに足りない。殺（黒いおひつじ）のようなあごヒゲであれば疑い深い。

口がウマのようであればその心を信じるのは難しい。口がトリのようであれば貧窮して異郷で亡くなる。口が河や海のように大きければ富貴で思うがままである。唇が朱い点のようであれば才知が抜きんでている。

舌が紅くて厚みがあれば精神が安定している。舌を伸ばして鼻

までとどけば長生きし、貴人となる。

ノコギリのように鋭い歯は肉を食べるのに適し、平らな歯は野菜を食べるのに適している。歯間にすき間があれば凶暴で残酷、すき間がなければすなおで穏やかである。微細な歯であれば長いあいだ貧しく、鬼歯という。

鑑頭、目、鼻、口、舌、齒法

虎頭高視、富貴無比。犀頭峯律、富貴鬱鬱。象頭高廣、福祿居長。鹿頭側長、志氣雄強。龜頭卻縮、喉豐酒肉。獺頭橫闊、志氣豁達。駝頭蒙鴻、福祿千鍾。蛇頭平薄、財物寥落。駱頭尖銳、貧回無計。兔頭蔑頤、志氣下劣。狗頭尖圓、泣淚漣漣。

眉直頭昂、富貴吉昌。眉薄而晞、少信多欺。髮欲細密、鬚欲麤疏。

眼目光彩明淨者、貴。眼鼻成就者、魂魄強美。眉目指瓜「一〇」者、好施。眼鼻口小者、多虛少實。眼鼻口大者、有實無虛。眼中赤脈貫瞳子者、兵死。

雞眼捲頭、不淫即偷。羊目直視、能殺妻子。猪目應瞪、刑禍相仍、亦主小貴。蜂目豺聲、常行安忍。螻蛄目、心難得。魚目、多回。猴目、窮寒。鷹視狼顧、常懷嫉妒。牛頭虎視、富貴無比。

鼻圓隆實、富貴終吉。鼻孔小縮、慳貪不足。蜣螂鼻、少意智。野狐須、無信期。殺羊鬚、多狐疑。

口如馬喙、心難信制。口如鳥嘴、窮寒客死。口如河海、富貴自在。唇如點朱、才學代無。

舌紅且厚、神識自守。吐舌及鼻、有壽復貴。

鬼齒。
鋸齒食肉、平齒食菜。疏齒猛毅、密齒淳和、細齒長貧、名曰

第一グループの「AであればB」は全部で45あり、①は16、②は1、③は29。「ブタの見張るような目（猪目應瞪）」は①と③が併記されているのでそれぞれ別物としてカウントした。②の将来に就く役職・地位に関する言及がほとんどないのが特徴。唯一、カウントした「目のなかの赤い筋が瞳を貫いていると兵士として亡くなる（眼中赤脈貫瞳子者、兵死）」の「兵死」だが、第三グループにあることから（後述）「兵士」として亡くなる意でとつたが、長寿ではないという意味であれば①になる。③は先述したように「心」の内容に近いのでとりたてて問題ではないが、①が②を圧倒しているのは注目に値する。代表となる「富貴」だが、富貴とは財産があつて地位が高貴であることを指す。有名などころでは『論語』顔淵篇に「富貴は天に在り」とあり、死生とともに人の努力ではどうにもならないものとされる。

「ハチの目、ヤマイヌの声（蜂目豺聲）」は『左伝』文公元年に楚の成王が子の商臣（後の穆王、暴君として有名）を皇太子に立てようと子上に相談した際に、子上が商臣を評して「蜂目而豺聲、忍人也」と言ったことを踏まえる。秦始皇帝も『史記』によれば「蜂準」で「豺聲」であつた。また「タカのような視線、オオカミのように振りかえ

る（鷹視狼顧）」は趙曄『呉越春秋』句踐伐呉外伝・句踐二十一年に、范蠡が越王句踐を評して「長頸鳥喙、鷹視狼歩」と言ったことを踏まえる「一一」。

続いて第二グループ。

アゴ、耳、胸、背、手、腹、ホクロ、顔のかたちをみる法
ツバメのようなアゴであれば封侯となる。アゴがとがって肉がついていなければ意思が弱い。

耳介が分厚くて大きく、はっきりしていれば貴人となりまた長寿である。小さくて薄ければ賤しくて若死にする。

トラの首のように丸くて太いと余りある富貴である。ツルの頭頂のようにはつきりと目立つと、財物が欠乏する。首が太く短いと富貴。長くて細いと貧賤。

胸と背がカメのようであれば偉大なる富貴となる。胸が長くて四角であれば智恵と勇氣は並ぶ者がいない。

手足はするどくて潤いがあり、指は張りがあり分厚ければ富貴。手がニワトリの足のようであれば、知恵が狭く短見である。

手がブタの蹄のようであれば、知恵は昏迷している。手がサルのようにあればきちんと仕事をして能力もある。

腹がたれ下がった壺のようであれば余りある富貴となる。ウシのような腹であれば食欲である。イヌのような腹であれば貧窮する。カエルのような腹であれば怠惰である。トカゲのような腹であればゆっくりとしている。

およそ人の声は深くて満ち足りているのがよく、浅くてうつろであるのはよくない。遠くで聞いても音が霧散することがなく、近くで聞いても小さくて音がなくなるといふことはない。浅くて力強くない「のはよくなく」、深くても埋もれない「のはよい」。大きくても濁らない「のはよく」、小さくてはつきりしない「のはよくない」「一二。細やかでいて乱れず、幽玄でいて明瞭。余韻が透き通っていて笙の笛の音のよう。宛転としてなめらかで淀みがなく美しく、まるやかで長く伸びるのがよい。

トラのような声ならば將軍、ウマのような声ならば勇猛な人。雄の声で雌の視線であれば虚偽が多く、息がつかまっていて声に重みがあれば誠実である。

およそホクロは大きくてはつきりしたものがよく、隠れた所にあると吉、露出した所にあると凶。

およそ人の顔は丸いのがよく、胸は四角いのがよく、上部は長く、下部は短いのがよい。

およそ人の胸は分厚いのがよく、背中はしっかりと背負えるものがよい。五岳がしっかりとっていて、四瀆が良い状態のものが

よい。頭が高くて足には厚みがあり、首が短くて腕は長く、トラや龍に似ているのがよい。いわゆる行住坐臥といった日常の立ち居振る舞い、飲食の嗜好、声色が同じ者はいない。

鑑頷、耳、胸、背、手、肚、黒子、面形法
燕頷封侯。腮尖乏肉、意志不足。

耳輪厚大鮮明者、貴而且壽。小薄者、賤而且夭。

虎項圓粗、富貴有餘。鶴頂了了、財物乏少。頸僂短者、富貴。長細者、貧賤。

胸背如龜、富貴巍巍。胸長而方、智勇無雙。

手足尖濃、指密而厚者、富貴。手如雞足、智意褊促。手如豬蹄、智意昏迷。手如狙掌、勤勞伎倆。

肚如垂壺、富貴有餘。牛腹貪婪、狗腹窮寒。蝦蟆腹懶、蜥蜴腹緩。

凡人聲欲深且實、不欲淺而虛。遠而不散、近而不亡。淺而非壯、深而不藏。大而不濁、小而不彰。細而不亂、幽而能明。餘響澄徹、有若笙簧、宛轉流韻、能圓而長。

虎聲將軍、馬聲驍勇。雄聲雌視者、虛偽人也。氣急而聲重者、真實人也。

凡黒子欲得大而明生。隱處吉、露處凶。

凡人面欲圓、胸欲方、上欲長、下欲短。

凡人胸欲厚、背欲負、五嶽成、四瀆好。頭高足厚、頸短臂長、

似虎似龍、所謂行住坐臥、飲食音聲、似非一處也。

第二グループの「AであればB」は全部で24。①は12、②は2、③は10。②の役職・地位がやはり少なく、一割にも満たない。最も多いのは①の富貴等に関する記述であり、黒子（ほくろ）については外から見なければ吉、見えたら凶と明確に吉凶を説いている。

また声より以下の、黒子、面（かおのかたち）、胸、背については「欲」字が付されて「しであるのがよい」という表現が使われていることも確認しておく。これは第一グループでも一組だけ「髮欲細密、鬚欲麤」とあつたが、つまりこれらには将来や性格・能力がどうであるという個別の占断・判断ではなく、理想型が一般的に存在しているということである。文頭に「凡」字を置かれていることからその一般性がみてとれる。また五岳、四瀆といった相術用語が解説されることもなく登場していることも興味ぶかい。すでに拙稿でも指摘したが、『五行大義』において五岳は顔の各部位に同定されていた（ただ四瀆は具体的な同定がなされていない）。

「ツバメのようなアゴ（燕頷）」は後漢の班超が「燕頷虎頸」で相術士から「此萬里侯相也」と占断されたことから遠国で封侯となる相とされる。『後漢書』班梁列伝に見える。また「雄の声で雌の視線であれば虚偽が多く、息がつかまっていて声に重みがあれば誠実である（雄聲雌視者、虚偽人也。氣急而聲重者、眞實人也）」は唐・馬総の『意林』

卷五が引く三国から西晋の人、楊泉『物理論』に「雄聲而雌視者、虚偽人也。氣急而聲重者、敦實人也」（同じく『意林』卷五が引く西晋、傅玄の『傅子』に「雄聲雌視者、虚偽人也」とある）とある「一三」。最後に第三グループを見る。玉枕と額文については原文では左のようにその形が図示されている。

腦頭高聳起將軍 三關玉枕萬戸侯 近下將軍 車輪枕封侯 三星枕封王 偃月枕封三公 四方枕封侯 十字枕封二千石 酒樽枕二千石 三公 卮上字枕封侯 圓枕封侯

額上有北字文將軍 額上有兩立文二千石 眉間有四立文封侯 八眉間有八字龍文將軍 眉間有三偃月文封侯 額上有覆月文將軍 八眉上有文通髮將軍 土眉間有土字文封侯 文眉間有文字文者兵死

頭骨、玉枕、額の文様をみる法

頭が高く聳え立っていれば將軍。三關玉枕（三つの関所のような玉枕）であれば一万户を領土とする諸侯で、下將軍に近い地位にまでなる。車輪枕（車輪のような輪の形）であれば諸侯となる。三星枕（三つの星が三角にならぶ）であれば王となる。偃月枕（三日月を寝かせたような形）であれば三公となる。四方枕（四角形）であれば諸侯となる。十字枕であれば二千石の俸給をもらう官僚となる。酒樽枕であれば二千石、あるいは三公。上字枕は諸侯となる。円枕は諸侯となる。

額に「北」字の文様があれば將軍。額に二本の縦棒があれば二千石。眉間に四本の縦棒があれば諸侯となる。眉間に「八」字の

竜文があれば將軍。眉間に三つの寝かせた月の文様があれば諸侯となる。額に月を覆うような文様があれば將軍。眉の上に文様があつて髪の部分まで通じていけば將軍。眉間に「土」字の文様があれば諸侯となる。眉間に「文」字の文様があれば兵として亡くなる。

およそ人において色は正しい色がよく、よこしまな色はよくない。白であればラードのよう、黒であれば漆を塗ったよう、紫であれば熟した桑の実のよう、黄色であれば蒸した栗のよう、赤であれば炎のよう、青であれば藍を浴びせたよう、以上のようにあれば三公、將軍・宰相となる。

鑑頭骨、玉枕、額文法

鑑頭高聳起、將軍。三關玉枕、萬戸侯。近下將軍。車輪枕、封侯。三星枕、封王。偃月枕、封三公。四方枕、封侯。十字枕、封二千石。酒樽枕、二千石、三公。上字枕、封侯。圓枕、封侯。

額上有北字文、將軍。額上有兩立文、二千石。眉間有四立文、封侯。眉間有八字龍文、將軍。眉間有三偃月文、封侯。額上有覆月文、將軍。眉上有文通髮、將軍。眉間有土字文、封侯。眉間有文字文者、兵死。

凡人色、欲正不欲邪。白如凝脂、黑如傅漆、紫如爛椹、黃如蒸粟、赤如炎火、青如浴藍、皆三公、將相也。

「鑑頭」は篇題から考えると「頭骨」に相当するが、なぜ「鑑頭」と表記されているかは不明「二四」。「下將軍」は軍を上中下の三つにわけ

たときの下軍の將軍の意。「三公」は時代によって異なるが、重職となる大臣。「二千石」は官僚の秩禄の等級で、郡の長官(郡守、太守)など地方の行政長官をあらわす。

第三グループの「AであればB」は全部で20。そしてすべてが②、つまり将来、就く役職・地位についてである。したがって三つのグループのなかでとりわけ異彩を放つ。前の二つではほとんど役職・地位については言及されていなかったからである。これまでのグループと「心」の内容の数を表にすると次のようになる。

	第一グループ	第二グループ	第三グループ	合計
富貴・福祿・長寿	16	12	0	28
役職・地位	1	2	20	23
性格・能力	29	10	0	39

第三グループには逆に富貴・福祿・長寿と、性格・能力についての記述が全くなく、あきらかに他の部位とは性質が異なる。とりわけ枕骨と額文については後の相書においても将来に就く役職がわかる部位として捉えられている(たとえば『神相全編』卷一〇・額紋部相、同・枕骨図式)。

鑑人篇の冒頭に「將軍を誰かに任せようとするのなら、まずその人の容貌をみて、それからその人の心を知るのである(夫欲任將、先觀其貌、後知其心)」とあった。將軍を選ぶことが目的なのであればこの

枕骨と額文の記述が目的に最も合致するであろう。しかし、鑑人篇は直接「夫欲任將」がわかる枕骨・額文を最後に配置し、「心」を知るための相術をさきに持つてきていることになる。それは將軍を選ぶには人の容貌から「心」を知ることが重要であると言明したからであり、そう言明した根拠は「凡人、觀其外、足知其内」という医学的知見に基づくからではないかと考える。

そして「心」の内容についてだが、やはり役職・地位は「心」という概念には含まれないであろう。ただし「心」がしかじかであるその結果としてしかじかの職位に就くとはいえるかもしれない。そう考えると富貴・福祿・長寿といった吉凶も直接には「心」ではないものの、「心」のありようの結果として吉凶が導かれる、とは言えるのか。このあたりは今後の課題としておく。

最後にもう一点だけ。これまでの兵書では士卒つまり兵士をどのように選抜するかということが重視されてきた。『呉子』の武卒、『孫臧兵法』の篡卒などがそれである「二五」。そうした伝統の中にあつて『太白陰経』が將軍の選抜を説いたことは注目してよいだろう。次元が一つ上にあがっているのである。大多数の士卒を統率し、兵法を用いて優位に戦略を進めるべく將軍をいかに選抜するのか。その選抜方法としてこの鑑人篇と次稿で検討したい鑑才篇が置かれている意味についてもまた改めて考えたい。

「二」拙稿『五行大義』にみえる相書について」（『人間生活文化研究』二〇二二年、三十二号、五五二頁―五六四頁。）

「二」湯浅邦弘「合理と呪術の兵法―『太白陰経』」（湯浅邦弘『戦いの神 中国古代兵学の展開』研文出版、二〇〇七年）を参照。兵学思想史研究からすると鑑人篇は呪術的なものであり、合理的かつ人為的な兵法という観点からは評価されない傾向にあったことがわかる。一方で鑑才篇は「国家戦略という高い見地から、軍を統治制御するハイレベルな組織を指揮する人材をいかに見分けて採用するかという問題を明らかにすることに注力した。その問題を議論する深刻性、系統性、全体性はこれまでにないものである」（張文才、王隴訳注『太白陰経全解』岳麓書社、二〇〇四年、一二八頁）と高い評価がなされている。「二」あるいは三停をそれぞれ三分割していたのかもしれない。後に相書では顔面部を垂直軸には十三分割して十三部位総要図などが描かれる。

「四」原文は「望下而就高、比大而獨小」。張文才、王隴訳注『太白陰経全解』の現代中国語訳を参考にしたが読みにくい。

「五」『周易』大有・象伝の「君子遏惡揚善」、『礼記』坊記篇の「君子貴人而賤己、先人而後己」を踏まえる。

「六」潘岳「西征賦」に「觀夫漢高之興、非徒聰明、豁達大度而已也」とある。

「七」宇佐美文理『中国藝術理論史研究』（創文社、二〇一五年）をはじめ同氏の一連の「氣象」に関する研究を参照。

「八」宇佐美氏「風景描写の意味―杜甫詩の風景表現」（曾布川寛、宇佐美文理篇『中国美術史の眺望―中国美術研究会論集―』汲古書院、二〇二三年、一四一頁）を参照。

〔九〕玉枕は足太陽膀胱経に属する経穴（ツボ）でもある。後ろ髪の毛の生え際から2.5寸（8センチほど）上がったところ。

〔二〇〕爪字と解した。

〔二一〕『呉越春秋』では「可與共患難、而不可共處樂。可與履危、不可與安」と続き、辛い境遇のときには一緒にいられるが、ともに楽しみを共有することはできないと述べて越王のもとを離れる。『史記』越王句践世家には「鷹視狼歩」の句はないが同内容。なお「鷹視狼顧」という表現は、時代は『太白陰経』を遙かに下って『三国志演義』第九十一回において司馬懿を評した語として知られる。

〔二二〕以上の「淺而非壯、深而不藏。大而不濁、小而不彰」は語句を補って訳したが、あるいは錯誤があるか。

〔二三〕楊泉の『物理論』については内山俊彦「楊泉とその思想」（京都大学文学部中国哲学史研究会『中国思想史研究』第十三号、一九九〇年）を参照。

〔二四〕「脳頭」について、許小峰『近代漢語大詞典 増訂版』は「头脑、智慧」と語釈し、『朱子語類』の用例をあげている。

〔二五〕湯浅邦弘『中国古代軍事思想史の研究』（研文出版、一九九九年）第二部第一章『呉子』第一節「凶国」と「武卒」、第二章『孫臏兵法』第三節「篡卒」の思想」を参照。

付記

本研究は大妻女子大学二〇二二年度戦略的個人研究費(23308)による研究成果の一部である。

（受付日：二〇二四年九月二五日、受理日：二〇二四年十月一五日）

佐藤 実（さとつ みのる）

現職：大妻女子大学比較文化学部教授

関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了・博士（文学）
専門は中国思想史

主な著書：劉智の自然学（単著、汲古書院）

On Physiognomy in“*Taibaiyinjing Jianrenbian*”

Minoru Sato

Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women’s University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

Key words : Taibaiyinjing, Jianrenbian, Physiognomy, The Book of Physiognomy,
The Book of Military, Art of War